授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2246 号

Prognostic impact of primary tumor location in Stage II-III colorectal cancer: A Single Center Retrospective Study

StageI-III の大腸癌における原発部位の予後への影響：単一施設後ろ向き研究

井上　学（いのうえ　まなぶ）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、治癒切除されたステージ II-III の右側結腸および左側結腸直腸癌の原発腫瘍部位の予後的意義を明らかにした臨床的に意義のある論文である。国立がんセンター中央病院で 2000 年から 2015 年に治癒手術を受け,ステージ II-III の大腸癌患者 2434 人を対象とした。そのうち 534 人（21.9%）に再発を認めた。初回手術後の無再発生存率（RFS)、全生存率（OS）を算出し、再発後の OS と再発確認日を起算日とした再発後の OS も算出。結果として左側結腸直腸癌は、ステージ II（p = 0.0037）およびステージ III（p = 0.032）で右側結腸癌よりも有意に悪い無再発生存率を認めた。一方、再発した患者では、左側結腸直腸癌は右側結腸癌よりも全生存率が有意に良好であった（p = 0.019)。再発確認日を起算日とした検討でも右側結腸癌の OS が悪いという結果になった。多変量解析でリンパ管侵襲を除く、年齢、再発時の CEA、N、そして原発巣の部位で有意な差を認め、再発後の OS にこうした因子が寄与する可能性が示唆された。原発巣切除後の再発部位の検討では、肝転移が有意に左側結腸直腸癌に多いという結果であった。要約すると、ステージ II-III の治癒切除後の原発腫瘍部位は、無再発生存率の有意に独立した因子であり、再発後の全生存率に関しても同様であった。これは治癒切除された大腸癌ステージ II-III において、再発を来す前は左側結腸直腸癌の予後が悪いが、一旦再発すると右側結腸癌の長期予後が有意に悪くなるといった論文である。大腸癌において左右の予後因子を検討した論文は多く存在するが、治癒切除後の日本人症例で単施設の比較的多数の症例を検討し、原発腫瘍部位が長期予後の因子と直接関連していることを証明できた意義のある論文であると言える。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。